

インド国民会議

- 1) インド帝国の成立 (1877) 以降、インドはイギリスを中心とする経済体制に組み込まれた。港と内陸を結ぶ鉄道、ヨーロッパとの電信網を整備、プランテーションではコーヒーや茶が生産され、綿花の生産も増大した。これらの経済成長は、概ねインド人を苦しめるものだった。
インドの鉄道は採算を度外視して建設されたが本国の投資家には高い利回りが保障され、インド人からの徴税で補填していた。
- 2) **インド国民会議**に先行する運動と組織
農産物価格の上昇で地税負担が相対的に減少、耕地の拡大、灌漑網の整備が進んだこと等から経済的環境に若干の改善が見られ、特に富裕層の中には社会全体に目を向け、民族的自覚を持つ階層が出現した。
①地主・役人・弁護士・医師・民族資本家らが台頭。既に一種の改革運動を起こしていた。
例えば、幼児婚、サティー（寡婦殉死）などの因習廃止。人種差別反対※。
※インド人判事がヨーロッパ人刑事犯を審理できるとする1883年の法案は、激しい反対で骨抜きにされた。
- ②1883年には、【1: 】 Banerjee 1848-1925らが、イギリスによる言論・出版の抑圧や人種差別的な法律などに反対する組織をカルカッタ（現コルカタ）、ボンベイ（現ムンバイ）、マドラスなどで結成した。これが**全インド国民協議会**である。
- 3) 1885年、イギリスは2)の①②のような状況に対抗して、ボンベイで72人の代表を集め、インド人の意見を諮問する機関として、第1回の【2: 】を開催した。「急増する反英勢力への安全弁」としてインド知識人層の不満を吸収しつつ、インド人エリートを植民地支配の協力者として利用するための体制補完的で穏健な団体であった。初期の議長は【3: 】 Naoroji 1825-1917 であり、これに参加した人々が組織した政治結社がインド国民会議である。「インド国民会議派」と「派」を付ける呼び方もあるが、他に別の派があるわけではなく、国会などと区別するための日本の慣例にすぎない。
背景には、1870年代に飢饉、疫病 農民や下層民衆の反乱が続発。イギリス人官僚も対応の必要を感じていたこともある。
- 4) インド国民会議は、当初は**インド人による代議制機関の設立とインド人官吏登用の拡大など漸進的改革**を主張していた。しかし、イギリスの対応は鈍く、1890年には有名なヒンドゥー系ジャーナリストの【4: 】 Tilak1856-1920 が参加し、1890年代には大衆的反英運動を呼びかける**反英的な民族運動組織**に転化した。
「ガネーシュ・フェスティバル」はティラクが組織化した。ガネーシュはシヴァ神の息子。顔は象。
- 5) 20世紀におけるイギリスのインド支配と抵抗闘争 ……「分割して統治せよ」
①1905年 イギリスは【5: 】を発した。インド総督はカーズン卿。
ベンガル州 — 分割 —

東ベンガル（ムスリムが多い）
西ベンガル（ヒンドゥー教徒が多い）

 ……抵抗運動の分断と地租の増収がねらいであった！
(反英運動の中心)
- ②ベンガル分割令は、インド全土における反英闘争を激化させ、1906年、**インド国民会議はカルカッタで大会を開き、いわゆる「カルカッタ大会4綱領」**を採択した。国民会議はれっきとした政治組織に変貌した。
a 【6: 】…**英貨排斥** えいかはいせき とも言う。イギリス商品のボイコット
b **スワデーシー**（語尾の「シー」は「シ」の場合もあり） 【7: 】（愛用）
c **スワラージ**（語尾は「ジー」にならない） インド人による**自治獲得**（究極的には独立）
d **民族教育の推進** 植民地教育を否定しインド人の自覚と誇りを促す教育を提唱
- ③1906年 【8: 】結成 年表的には②→③だが、③への動きは②以前からあった。
インド国民会議による反英運動の盛り上がりに対抗して、ベンガル分割によって、ムスリムが多数派となる州が成立することに期待する人々が、イギリスの支援下で結成した**インド=イスラーム教徒の政治団体**である。ヒンドゥー教系の国民会議派との分断をはかるイギリスの意図がよく現れている。
第2次世界大戦後、パキスタンの分離独立の原動力となり、ヒンドゥー教徒とムスリムの分断国家が形成されたことを考えると、インド史に与えた影響は極めて大きい。
ベンガル分割令は、**1911年に撤回させた**。《頻出》
しかし、同年にイギリスはインド帝国の都をカルカッタから【9: 】へ移動させた。
ガンディー 1869-1948 が帰国するのは1915年。ネルー 1889-1964 はベンガル分割令の時は16歳の少年である。彼らの活躍はこの後である。

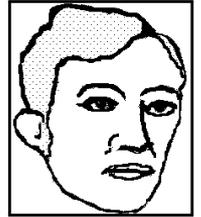
インドネシア（オランダ領東インド）における民族意識の形成

- 1) 1830年から行われた強制栽培制度などの植民地政策でインドネシアの社会は疲弊していた。
- 2) 1908年、知識人が主体となり、ジャワの伝統文化の再評価を通じて、民族意識の形成をめざす【10: 】（最高の英知）運動が起き、インドネシア人の社会的地位の向上を求めた。
オランダは、オランダ語による教育機関を設置した。ここで学んだインドネシア人の中から民族主義運動と女性解放運動の先駆者と言われる人物が出た。**カルティニ**（1879-1904）である。
- 3) 1911年、ジャワ中部で【11: 】（サレカット=イスラーム）が結成された。ムスリム商人の団体から始まり、初めは相互扶助や啓蒙活動を行っていたが政治活動に向かい、1910年代末には反オランダ独立運動に発展していった。1918～20年の民族運動高揚期には中心的役割を果たしたが、植民地政府の弾圧で組織は崩壊した。

フィリピンのナショナリズム

No.152参照

- 1) 19世紀末には、スペイン統治下で、現地人司祭の任用を求める運動が始まった。医師で作家の【12: 】 1861-96 は、スペイン留学・欧米旅行の見聞から民族主義に目覚め、1892年の帰国後は小説でスペインの暴政をあげき、フィリピン民族同盟を結成、平和的な社会改革運動を展開、その中で民族意識が高まった。つまり、19世紀末に、史上初めて自らを「フィリピン人」とする意識が生じた。スペインは、これらの言論活動を弾圧し、ホセ=リサールはミンダナオに幽閉された。彼は、1896年キューバで起きた第二次独立戦争にスペイン軍の軍医として協力することで自由を得ようとしたが、1896年のカティプーナンの蜂起（後述）に関与した革命指導者として銃殺された。
- 2) 1896年、急進的秘密結社のカティプーナンの蜂起した。これを【13: 】 1896-1902 と言ひ、革命政府が樹立された。しかし、内部分裂とアメリカの介入で鎮圧された。革命政府大統領【14: 】 1869-1964 はスペイン軍に追われて亡命した。
- 3) 米西戦争 1898 が勃発すると、【14】 はアメリカの支援で帰国、1899年にはルソン全島を解放し、第一次フィリピン共和国を樹立した。もちろん、大統領はアギナルド。マロロスで憲法を發布したので通称ないしは憲法制定後の名称は【15: 】。
- 4) 1898年、米西戦争でアメリカはフィリピンの領有権を得た。米西戦争でアメリカが得たのは、太平洋ではフィリピンとグアム、カリブ海ではプエルトリコ。 No.141参照
- 5) アメリカは、第一次フィリピン共和国（マロロス共和国）を認めず、【16: 】 が勃発した 1899-1902。この時のアメリカ大統領は、マッキンリーである【類出】。アメリカはマロロス軍を破ってフィリピンを植民地にした。アギナルドは1901年逮捕され引退。アメリカは1902年から本格的な植民地統治を開始。
- 6) アメリカは、1934年には10年後の独立をフィリピンに約束した。アメリカとしては、植民地としての領有にはこだわらず、親米政権が続き、経済的利益と軍事基地が確保できればよいと考えていたと思われる。10年後の1944年はアジア・太平洋戦争の最中であり、既に1942年から日本軍に統治され、独立は先送りされた。



フランス統治下のヴェトナム

- 1) 1904年、伝統的知識人の【17: 】 1867-1940 が維新会を結成し、日露戦争に勝利した日本に学ぶために日本への留学をすすめる【18: 】 をおこしたが、日仏協約(1907)を結びフランスとの関係を重視する日本政府は、フランス政府の要請で留学生を追放し、運動は失敗したが、その後の独立運動に大きな影響を与えた。
- 2) 日露戦争における日本の勝利が、その本質はさておき、世界中の民族運動を大きく激励したのは事実である。しかし、少なくともヴェトナムでは、日本への賞賛と期待は、早くも前掲 1) で裏切られた。また、1923. 9. 1は関東大震災のあった日として広く知られているが、実は火災がおさまった後に、東京、神奈川、埼玉などで、流言飛語のために何千人もの在日朝鮮人・中国人が日本人によって殺されたことは案外知られていない。手を下したのは官憲ですらなく、自警団などに結集した日本の一般民衆であった。やや遅れているが、ほぼ同時期の出来事であり、これらはその後の日本とアジア諸民族との関係を象徴しているという見方もある。
- 3) ヴェトナムの独立運動家は中国と結びつきを深めていった。運動は、ファン=ボイ=チャウ 1867-1940 が中国の国民党の助力を得て1912年に広東で結成した反フランス秘密結社ベトナム光復会に引き継がれた。武力革命をめざしたが、弾圧され衰退した。
- 4) 民族運動家ファン=チュウ=チン1872-1926 らは、ファン=ボイ=チャウの方針を批判し、フランスと協力して啓蒙的近代化をめざした。ファン=チュウ=チンは、1907年、ハノイに【19: 】 を設立し、民族運動を支えた。しかし、このような穏健な運動でさえもフランスによって弾圧され、【19】 も1年余りで閉鎖された。以後、知識人の運動は武力闘争に傾斜していく。

フランス統治下のカンボジア

- 1) ヴェトナム南部出身でクメール人（パリ留学歴あり）のソン=ゴク=タンは、1942年の僧侶や市民を中心としたプノンペンでの大規模な反仏デモを指導した。彼はヴェトナム南部に進駐した日本軍に保護された。
- 2) 1945年3月、日本軍がフランス軍を武装解除すると、カンボジアは【20: 】 のもとで独立を宣言、ソン=ゴク=タンは外相に就任した。

西アジアの民族運動

既にNo.146で詳述したので参照せよ。 以下は摘要。

「東方問題」の激化は西アジア諸国の人々に民族的自覚を促した。

- 1) アフガニーの思想（パン=イスラーム主義）はウラビー運動や「タバコ=ボイコット運動」に大きな影響を与えた。
- 2) オスマン帝国では1908年に青年トルコ革命が起きた。
- 3) カージャール朝統治下のイランでは、「タバコ=ボイコット運動」が展開された。1906年には立憲革命が起きたが、イギリス・ロシアの介入で挫折した。